令和7年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【大宮国際中等教育学校】

① 今年度の課題と学力向上策

	学習上・指導上の課題		学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	＜学習上の課題＞ 単元ごとの学ぶ意義が、生徒の学びに与える影響を質的に分析することが求められている。 ＜指導上の課題＞ 生徒の目的意識を高める課題設定と、指導改善に向けた情報活用の体制整備が課題である。	⇒	生徒目線を取り入れた授業改善に向け、各教科会で重点項目を検討・決定する【6月】。自己評価や振り返りを通じて研究・実践を推進し【7月～9月・随時実施】、その成果は教科主任会【通年・隔週実施】や全体研修【10月】で共有・協議し、継続的な改善に生かす。
思考・判断・表現	＜学習上の課題＞ 生徒の視点を授業に反映するための意見収集と対話の場の体系化が課題である。 ＜指導上の課題＞ 教職員間の共通認識形成に向けた対話と時間の確保が課題である。	⇒	校内研究と連携し、学ぶ側の視点に立った授業観察の実施および生徒も交えた校内研修を行う【7月～9月・随時実施】。学期ごとに生徒へのアンケート調査の実施及びフォーカスグループに対するインタビューの実施とその分析を行い、指導改善に活用する【10月・3月／年2回】。

② 全国学力・学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	単純な記述形式による知識確認では高い正答率を示し、基本的な知識事項の記憶・活用が十分に定着していることが示唆される。今後も、知識・技能の活用につながる学習活動を一層強化していく。
思考・判断・表現	思考・判断・表現を問う問題では全国平均を大きく上回る正答率を示しており、本校の探究的かつ振り返りを重視した学習活動が効果的に機能していると考えられる。特に、知識・技能を関連付けて推測したり、探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連に着目した振り返りを適切に表現できている。

③ 中間期報告／中間期見直し

	評価（※）	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	A	生徒の視点を取り入れた授業改善を進めるため、学校運営協議会に生徒が参加している。隔週で実施している全体教科会では、各教科における授業改善の実践を共有するとともに、教科ごとの研究計画やその進捗状況については、教科主任会などを通じて相互に確認できている。	変更なし
思考・判断・表現	B	校内研究と連携し、担当教科内外で授業観察を実施している。また、生徒を交えた校内研修については、学期ごとの学習アンケートとフォーカスグループを基盤とした研修の計画を進めている。これにより、生徒の声をデータと実感の両面から取り入れ、指導改善につなげていく。	変更なし

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

④ さいたま市学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	全教科で基礎的・基本的事項の定着が安定して見られ、平均正答率も市平均を上回る状況が続いている。経年変化も小さく、本校生徒の学力傾向は確立しているといえる。一部設問で用語の知識定着や条件の読み取りに課題が見られたが、教科主任会で分析を共有し、言語活動の充実や振り返りの質の向上を図ることを確認した。6年間の系統的指導で十分に補強可能な範囲である。
思考・判断・表現	思考・判断・表現の領域では、複数の資料や情報を関連付けて考察する設問で安定した成果が見られ、探究的・概念的理解を重視した授業の積み重ねが反映されている。一方、記述問題では根拠の明確化や論理の構造化に差が見られるため、説明の具体性と論理性を高める指導を全教科で一層強化していく方針を共有した。

⑤ 学力向上策の実施状況

	評価（※）	
知識・技能	A	単元の学習目的の共有や、全体教科会での授業改善実践の共有を通して、指導の見通しや評価の在り方の共通理解が進んだ。また、生徒アンケートにおいてもフィードバックに関する肯定的回答が一定割合を占め、基礎的知識・技能の定着を支える指導改善が進展した。一方で評価の即時性や観点の精選など、さらなる改善の余地はある。
思考・判断・表現	A	探究活動と将来目標との関連を言語化できる生徒が増加していることから、学習の目的意識を伴った思考の深化は着実に進んだ。また、学校運営協議会への生徒参加や、全体教科会での実践共有により、生徒の視点を踏まえた授業改善が図られた。しかし、総括課題への取り組み時間や質に関しては課題も見られ、思考・判断・表現を一層高めるためには、評価基準の明確化とフィードバックの質的向上を継続的に図る必要がある。

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

⑥ 次年度への課題と学力向上策

知識・技能	単元の学ぶ意義の共有は進んだが、評価観点の精査やフィードバックの即時性には課題が残る。次年度は評価基準の整理・合理化を進め、振り返りの時間を意図的に確保することで、基礎的知識・技能の定着状況を可視化する。また、前後期課程の評価の接続を図り、学びの系統性をより明確にしていく。
思考・判断・表現	探究活動と将来目標の関連付けは進展したが、思考の深まりに差が見られる。次年度は探究テーマ設定の質を高めるとともに、対話的な学びと多面的な評価を充実させる。授業見学や研究協議を通して実践事例を共有し、問いの質を高める授業改善を継続的に推進していく。